

街を行く

第61回 マニラ（前編） MAnira

街に溢れる若者

30年ぶりにフィリピンの首都マニラへ訪れました。中年以上の男性には「アジアの一大歓楽街」が思い浮かぶでしょう。たしかに、かつてはそんな色眼鏡で見られた時期がありました。しかし今では2,000万人以上の人口を抱える、世界有数の大都市となっています。今回は新しいフィリピン・マニラの顔をみていきましょう。

マニラの代表的な街に「マカティ」があります。かなり昔に開発され、企業拠点の密集度はかなりのものです。外資企業のほとんどがここに拠点を構えており、もちろん日系企業の現地法人も大抵はこの街です。一方、何かあれば街全体が渋滞するほど交通インフラが悪く、経済活動範囲は思ったほど広くない。したがって、事業会社がここである程度成功し、さらなる成長を目指したいなら、次なる街を開拓する必要があります。

マニラでは中核エリアの人口がドーナツ状に集積し、それが広がるかたちで経済圏が拡大するのではなく、中小都市のドーナツが繋がり合うかたちで経済圏を形成しています。これが先進国の都市の形成と違うところです。

マニラに新しくできた“ドーナツ”に「ボニファシオ」という街があります。現在開発中のこの街はマカティも含め“グレートマニラ”と呼ばれています。

その容貌はシンガポールとまるっきり同じに見えます。同じ華僑主体で開発されているのですから、まあ似るのも当たり前のかもしれません。近い将来は、ここに証券取引所が移転し、金融センターになります。そうなれば外国系の事務所も転入してきますから、彼ら向けの住宅整備



新しい街「ボニファシオ」の開発進むオフィスビル群と、街なかのショッピングモール風景

が急がれます。現にインターナショナル・スクールや日本人学校も開校しています。ショッピングモールを構成する店舗のブランドは日本と比べても決して引けをとりません。われわれが暮らしても不自由の無い生活ができるというのがコンセプトのようです。

また、この国の発展に大きく寄与しているのが言葉の問題でしょう。長らく米国による統治が進んでいるため英語が公用語のようになっています（もちろんマニラ全体ではありません）。

それにしても、小生はアジアの中で最もきれいな英語を話す街の一つだと思います。現に欧米のデータセンターが他のアジアの国々から移転してきている話も

聞けるところです。それに料理です。世界的な定番料理も美味しいですが、やはり伝統のスペイン料理は群を抜いていますね。食も街の発展を占う要素かもしれないですね。

南 一 弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発（旧松下興産）の代表取締役役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役役に就任。